慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	世界大戦の財政史的意義 : 全體戰爭財政の最大の經驗
Sub Title	
Author	高木, 壽一(Takagi, Juichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.3 (1937. 11) ,p.45(373)- 66(394)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19371100-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

世界大戰の財政史的意義

——全體戰爭財政の最大の經驗——

高木壽一

一

近代國家財政の發展過程に於て、世界大戰は一大轉換の原因を作つた。世界大戰は國家財政が社會經濟の發展に對して持つ機能を著しく變化せしめたのである。世界戰爭が單に武力鬪爭による戰爭であるばかりでなく、その交戰國民の全經濟力を擧げての戰爭となつたので、戰時の國家財政がその社會經濟全般に對する役割が俄かに强大なるものになつた。世界戰爭に於て財政上の準備が豫め最も完成されて居たのはドイツであるが、そのドイツに於てすらも、長期大規模の戰爭財政がいかなる社會經濟的機能を持ち、その機能を遂行せしめるには最も强力なる經濟統制が準備されて居なければならぬことには考へ及ばなかつたのである。近代戰爭は長く續くものでないと考へられて居たのである。

ドイツは其計畫の如くに最初の强襲によつて西方及び東方の敵を決定的に潰滅せしめることが出來なかつた。西部戰線に於てはフランス軍の計畫的退却によつて、ドイツ軍の前衞は巴里へ五十粁の地點にまで達したが決定的勝利には達せず、やがてフランス軍の大逆襲によつて「マルヌの戰」となつた。東部戰線に於けるタンネンベルグの大勝にも拘らず、オーストリア・ハンガリア軍は南ポーランド及びガリチアに於て大敗した。斯くしてドイツの企圖した速戰卽決は不可能となつて戰爭は長期戰に移つた。

ドイツは戰時財政動員については豫め準備されてあつて殊に開戰當初に於ては最も敏活有效にその諸對策が實行に移された。そのために英・佛兩國に見る如くモラトリアムを施行してその經濟界の活動を拘束するが如きことがなかつた。戰時緊急對策のみならず、戰時財政政策に對しても多くの考慮が拂はれて居た。しかし長期大規模の戰爭となつて戰爭遂行に要する物資の供給を確保する準備がなかつたことは致命的缺陷となつた。戰時財政政策は、その國民經濟にあつて戰費の資源として利用し得べき經濟力を戰爭遂行のために使用しまたは外國の生產物・生產力を利用するために、その所要の物資及び勞働力を獲得する媒介手段としての戰爭資金を調達せねばならない。戰爭資金は戰費そのものと同じではない。戰費をなすものは物資及び勞働力である。それ故に戰爭資金を通じて有效に所要の物資・勞働力を戰爭の目的遂行に役立たしめるには、豐富なる經濟力の存在し、その經濟力が卽時に戰爭の遂行に役立ち得るやうに組織されて居らねばならない。世界大戰前に於てドイツは、戰時財政政策を準備して居り

ながら、その財政政策をして有效なる作用を發揮せしめるに必要なる前提條件としての經濟統制が準備されて居らなかつたのである。

例へば、リーサー教授はその名著「財政上の戰備及び作戰」（一九一三年版）に於て、ドイツの將來戰に於ける一ヶ年の所要戰費を約六十五億七千萬マルクと計算した。（同書二〇―二三頁參照）此程度の戰費がドイツの必要とする戰費と想定されて居たとすれば、其當時のドイツ國民經濟に於ける生産力にとつて必ずしも過大なるものでないと考へるのは理由なしとしない。其上に戰爭期間を約半ヶ年と想定し、且つ戰後に敵國をして賠償せしめることを豫想したとすれば、尙ほ一層に戰費支辨のために國民經濟の戰時統制を必要とするとは考へられなかつたのも理由がある。戰時財政政策は戰爭資金を調達することのみを課題として、その資金を媒介手段としていかにして有效に戰費の資源をなす經濟力を戰爭遂行に利用し得べきかを考慮する必要がなかつたのである。

一九一三年に於けるドイツ國民經濟に於ける國內生産は次の如き構成を示して居た。

1、農業生産	九〇億マルク
2、工業生産手段の生産	一二〇億マルク
3、工業消費財の生産	八〇億マルク

4、商業・交通による價値增加	一〇〇億マルク
5、住宅利用	四〇億マルク
6、人的勤勞	五〇億マルク
合計、國內生產	四八〇億マルク

一九一三年ドイツの外國貿易

	輸入	輸出
1、家畜	三億マルク	—
2、食料品・飲料品	二八億マルク	一一億マルク
3、原料・半製品	六三億マルク	二三億マルク
4、全製品	一四億マルク	六七億マルク
合計	一〇八億マルク	一〇一億マルク

右の如く一九一三年のドイツ國內生產約四百八十億マルクに對して、ドイツ帝國及び各支分國・地方公共財政の經費總額は約七十三億マルクであり、殊に物資及び勞務に對する需要を現はす物件費及び人

件費は約五十九億マルクであつた。ドイツ帝國財政の經費は約二十七億マルクであり、そのうち軍事費が約二十億マルクを占めて居た。

斯くの如くドイツの社會生産物及び外國貿易の構成と、それに對して公共財政全般、殊に帝國財政の經費として要求された部分の割合を考慮すれば、世界大戰前にリーサー教授が想定した一ケ年の戰費約六十五億マルクの增加ならば、軍需品貯藏量のほかに、國民經濟力を以てその戰爭需要に應ずることは困難ではなかつたと考へられる。然るに豫期に反して戰爭は著しく大規模となり、一九一四年八月一日より翌年七月末日までのドイツ帝國財政の經費總額は約二百一億マルク、一九一五年八月一日より一ケ年の經費は二百四十一億マルクに達して、大戰前に於て一般に合理的と考へられて居た戰費所要額の想定は全く覆されたのである。斯る豫想を遙かに超えた大規模の戰費の必要を充たすには平時からの軍需品貯藏を早く減少せしめることになり、續いてその經濟力を以て軍需品・食糧品及び勞働力を獲得する。戰爭の目的を達するためにその大規模の戰費の消耗が國民の經濟生活にいかなる結果を與へることになるか。生産力の急速なる擴張も戰費增加の速度に及ばなければ、國民の生活資料を剝奪し窮乏せしめることになる。その戰時財政の社會經濟的機能が、戰爭の進行に於ける最も重要なる決定條件となつた。

二

ドイツがフランスに加へた最初の强襲を挫折せしめた「マルヌの戰」と、それにほゞ匹敵する大激戰であつたと云ふ一九一八年七月—八月に亙る西部戰線の戰鬪とは世界大戰に於てドイツを敗戰に陷れた「始め」と「終り」であると思ふ。戰局について云へば「マルヌの戰」がドイツの敗戰の第一關門を作つたと云へよう。それは戰爭を長期戰に移し、英國の海上封鎖をして有效なる結果を生ぜしめたことになる。

「英國は戰時必須の原料品の輸入を杜絶せしめてドイツを無抵抗にし、食糧品の輸入を斷絶してドイツを飢餓に陷れ、以てドイツに降服を强いたのである。これは當初から英國の戰爭手段であつたのみならず、明かに戰爭の目的であつた。卽ちドイツは經濟的壓迫のために、軍事上いかに働いても、降服を餘儀なくされ、同時に英國にとつて非常に不愉快なるドイツの經濟的地位に致命的打擊を與へること、之が英國の目的であつた。……

ドイツは石炭と鐵とを自國に產出したが、他の重要金屬については銅の如きは主として外國に仰ぎ、ニツケルの如きは全然外國から輸入して居た。ドイツの輸出工業は勞働者階級の大部分に有利な仕事を提供して居た。大多數のドイツ國民の食糧・衣服・職業、更にそれ以上にドイツ陸海軍の兵器・彈藥・飼料の配給は對外貿易が杜絶したため極めて深刻なる脅威を受けた。全然軍事上の鬪爭に限られた戰爭に於てすら大なる經濟的困難が伴ふものであるが、今度の戰爭ではそれが無限に擴大されたのである。……

戰爭が四年以上も續くと考へられなかつたと同じやうに、外國との交易杜絶が斯くも繼續して、斯くも效果あるものとも豫想されて居なかつた。……戰爭の當初には「經濟戰爭と云つてもドイツが隣接中立國を通じて重要なる輸入をなすに充分なる餘地を殘すであらう」と期待して居た。」(カール・ヘルフェリヒ著 世界戰爭。安井源雄氏邦譯、一六八—七三頁參照)

英國が海上封鎖を行へばドイツが海外より原料品の供給を受けることが困難となるを推察して、その用意ありやをドイツ陸軍省に質したのがラテナウであり、その注告に基いて陸軍省内に戰時原料課を設けて戰爭に必要なる原料品の供給を確保することゝした。先づ軍需資材の供給確保に始まつて次第に他の産業部分に及むだが、ドイツの戰時經濟統制も最初から問題の全範圍を包括した統一的計畫から出發したのではなく、漸次に模索的な試みから出て、或時は不充分なるまた或時は必要以上に過大な應急處置を施して、必要に驅られて最後に全經濟部門の最も强力なる國家統制に達したのである。

ドイツ軍がベルギー及び北フランスを占領したことは、原料品の供給を强化してドイツの生産力の有效なる補充となつた。またポーランドの工業地帶を占領した時にも、特に紡績業の原料品半製品の供給を增加せしめた。しかしそれらのいづれの地方を占領してもドイツの食糧問題を緩和することにはならなかつたのである。殊に隣接中立國よりの物資の輸入が重要なる供給の途であつたが、一九一六年の末以來英國その他聯合諸國の壓迫によりドイツに殘された中立國の最後の資源も漸次涸渴し、殆と之を維

持し得なくなつた。ドイツの隣接中立國に聯合諸國が最後に加へた壓迫は一九一八年三月オランダ政府に全船舶の引渡しを要求したことである。之はオランダを通ずる物資供給の途を斷つことになつた。また三月下旬にはドイツ軍は西部戰線に大攻擊を加へて英佛軍を擊退したが、ドイツ軍も疲れて活動が停滯した。その時に米國軍の援助が次第に效果を現はし始めた。ドイツの潛航艇戰が豫期に反じて軍隊・軍需品の輸送を制壓することが出來なければ、米國軍の參加は益々聯合國軍の戰鬪力を强化するを避け得なかつた。更に一九一八年七月十五日に始まるドイツ軍の大攻擊とその失敗、次いで英佛米各軍の逆襲によるドイツ軍の退却によつて、勝利の可能性は全くドイツを離れた。

カール・ヘルフェリヒは敗者として述懷して曰く「ドイツ國民は他國の援助を殆ど全く斷たれながら四年以上の長きに亙つて戰爭の大重壓に堪えて來た。ドイツ軍は少數の脆弱なる同盟軍のみを味方として驚嘆すべき武功を立て、兵員武器に於て壓倒的優勢なる敵を防いできた。ドイツ國民精神のあらゆる粹を盡して、全世界に反抗して殆ど勝利を得るばかりになつて居た。」（前揭邦譯書七七一頁）

然らばドイツが勝利を得るばかりになりながら敗戰に陷つたのは何故であるか。

三

勝者側のロイド・ジョーヂはその「大戰回顧錄」に於て、ドイツ敗戰の主要原因を擧げて居る。

第一の失策にして結局に於てドイツ人の希望に致命的打撃となつたのはベルギーの侵略である。ドイツ人は巴里を攻略し、フランス軍を擊破する機會と、英國を戰爭に引き込む可能性或は英國の援助が效果を生ぜざる前にフランスを片付ける可能性とを比較考慮した。或る不可解なる軍事上の失策、或は寧ろ數次の失策によつて、正にその掌中に陷らむとした時に到つてフランスの首都に入る機會を逸した。ドイツ軍はフランス軍を擊破することすら出來たかも知れなかつた。其時に再び來らざる機會を逸したのである。……

ドイツの第二の重大なる失策は一九一六年に、其兵力をヴェルダンの無效なる攻擊に振り向けたことである。それによつて二の機會を失つた。一は一九一五年に極めて好調に始められたロシア軍最後の擊滅であつた。若しドイツ軍が一九一六年にその有利なる立場を押し進めたならば、ロシアは一九一八年の春を待たずして一九一六年の夏に媾和を結ぶの已むなきに到つたであらう。英國軍は一九一六年の晩夏以前には裝備が完全でなく、西部戰線に充分の壓迫を加へてドイツのロシア攻擊を緩めねばならなくするほどの力はなかつた。その時までにロシア軍は收拾し得ざるほどに擊破されたであらう。一度ロシアが敗退すれば、米國の參戰に先立つて未だ飢餓と窮乏とが中歐諸國の士氣を弱めるに到らないうちに、ドイツ軍は其戰勝の全軍を轉じてフランスに向けることが出來たであらうし、オーストリアはその全勢力をイタリー擊破に向けることが出來たであらう。……

第三の戰略上の失策は一九一八年の大攻擊であつた。

しかし世界大戰中に於て、ベルギー侵略後のドイツの最惡の大失策は、米國との抗爭であつた。それは最もよく云つても無謀なる誤算であり、惡く云へば想像も及ばぬ愚擧であつた。

War Memoirs of David LLoyd George. VI p. 3350—3352.

卽ち世界大戰に於てドイツの敗戰に導いた諸原因としてロイド・ジョーヂの列擧したるもののうち、ベルギーの侵略は英國の參戰を促進し、英國の海軍力による海上封鎖によつてドイツの軍需品及び食糧品の供給、殊に後者の補給を缺乏せしめた。また英國の海上封鎖に對抗したドイツの無制限潛航艇戰の强行は、英國を飢餓に陷し入れやうとする直前に於て米國との抗爭を激化し、無制限潛航艇戰の效果を過信したドイツをして遂に米國を聯合國側の戰線に驅り立てたことになる。そして無制限潛航艇戰が所期の效果を達し得なかつたことは、その期待が大きかつただけに一層ドイツに多大の失望を與へた。しかも米國の聯合國側への參加は軍需品食糧品の供給を豐富にし、大規模の戰爭遂行について有利なる條件を與へ、時日の經過とともにその條件の效果が現はれるに到り、次第に戰鬪力がほゞ均衡して來た限界點に於てその條件の效果が加はつたので、最初は有力なるものとも思はれなかつたのが遂に勝敗の岐路を決定するほどの力になつた。

ロイド・ジョーヂは全體戰爭に於ける食糧補給問題の重要性について次の如き經驗を語つて居る。

「何事よりも戰爭は國民精神力の鬪爭となつて居た。この大規模の鬪爭に參加したすべての國民はその背後に永い武勳の歷史を持つた極度に勇敢な國民であつた。その種族はみな鬪爭的な種族であつた。それらの國民のどれも容易に屈服しやうとはしない。其軍隊が敵に對して戰線を擊破されずに保つて居る限りは確に屈服しやうとしない。數次の痛烈なる敗戰があつても未だロシア、ベルギー、ルーマニアあるはセルビアをして降服せしめるに到らなかつた。交戰國のいづれかの側に於ける潰滅は、其國民の精神を消耗せしめる或る原因から現はれることになつた。軍隊及びその背後の國民の勇氣及び確乎不屈の態度を刺戟し維持するために行はれる文書及び演說に訴へることの技巧並に效果にも據る所が多い。しかし包圍戰の歷史は、自からが保護して居る人々の間に日々食糧窮乏の有樣を見ながらそれに長く耐え得るのは、不撓不屈の精神を持つ少數の男女だけであることを證明して居る。吾人の問題を考慮する場合に食糧補給問題は一般問題のうち最も重要なる地位を占める。

世界大戰の前半は海陸の輸送及び軍需品の供給が戰爭を有利に展開するに如何に致命的問題であるかを明かに示した。戰爭の後半には軍隊のみならず非戰鬪員に對する食糧の適切なる供給が戰爭の續行上の必須の條件であると云ふ、この既に前に明かになつて居らねばならない事實がすべての交戰國に判かるやうになつた。最後の問題は戰鬪よりも食糧に依つて定まる所が多かつた。人員の缺乏、軍需資材の調達及び各地の戰線へのその輸送に運輸力を集中したために、食糧補給に重大なる結果を既に與へて居

た。私（ロイド・ジョーヂ）が一九一六年十二月、最高の戰爭指導の地位（註・總理大臣）に就いた時に、ロシアは食糧缺乏のために正に崩壞せんとする所であつた。ロシアに於ては、軍需品の問題も決して解決されては居なかつたが既に著しく改善されて居た。多大の損失があつたにも拘らず、その兵員減少を補充すべき人員を缺いては居なかつた。しかし都市及び戰線の或部分に對する食糧の補給は全く崩れ、ロシアの最も恐ろしいその冬のうちに、數百萬の家族は食糧と燃料の缺乏によつて氷點下數度の寒さに震へて居た。之等の飢えと寒さに襲はれた民衆、兵士の兄弟妻子にとつては、革命は容認し得たばかりでなく避け難いものであつた。それは飢餓に代はる唯一の途であつた。食糧及び燃料が充分であつたならばロシアを最後まで崩壞せしめずに置くことが出來たであらう。但し恐らく敵を壓迫する勢力 steam roller ではなくなつて居たとしても、少くとも敵に抵抗する障壁 stone wall にはなつたであらう。

オーストリアも亦食糧の缺乏に益々深刻に苦しむで居た。一九一六年のハンガリーの收穫は慘憺たる凶作であつて、一九一七年もその不足を充たすことが出來なかつた。小麥ばかりでなくミルク及び肉類も益々缺乏して來た。此不足がオーストリアをして媾和を急がせることに貢獻した。之ガオーストリアの最後の降服の決定的原因の一であつた。その崩壞が起つたときに戰線に於てはオーストリアの軍隊は外國の土地にあつて未だ擊破されては居らなかつた。ドイツの危機も明かに近づいて居た。ドイツは恐ろしい "turnip winter" を送つて居た。ドイツの馬鈴薯の收穫は凶作であつて人々は蕪菁に依食せね

ばならなかつた。此冬の間にドイツの一人當りの食糧配給は人々を健康に維持するに必要なる最低量の半分の價値の熱量しかなかつた。一九一七年までにドイツの鑛山及び軍需品工場の生産量は其勞働者の健康狀態低下の結果として著しく打擊を受けて居たと云ふ。

戰爭は飢餓戰爭となつて居た。結局に於て食糧補給の缺乏が四年間の殺伐なる戰鬪に於ていづれの戰線に於ても不撓不屈を示して居た精神を遂に挫折せしめた。それ故にすべての交戰諸國に於て一九一六年の末には、食糧が勝利に達する機會として益々重大なる要素となりつゝあり、また最高の要素とまでなつた。交戰國はみな包圍された國民であつた。

それまでは英國、フランス、イタリーに於ては其國民のいかなる部分も食糧の不足によつて現實に窮乏に苦しむことはなかつた。制海權は未だ聯合諸國の掌中にあり、世界の穀物生産國を未だ聯合諸國の食糧需要に自由に利用し得た。但しそれを充分に滿たすに足る量ではなかつたが、その食糧貯藏を空にするのを防ぐには足るほどのものであつた。しかし潛航艇はこの食糧供給に不安增大の條件を提供した。一度、海上輸送が杜絶すれば——また急速に杜絶しつゝあつたが——聯合軍の抵抗力は崩壞したであらう。すべての國民は停止する所なき結果を持つ犧牲及び慘害に愕然としまた幻滅を感ずるやうになつてゐた。それに飢餓の感が加はると幻滅を不滿の念に轉換せしめることにならう。食糧は國民精神力の實に根柢を作すものであり、等しく勇敢なる國民の間の長期戰爭に於ては精神力は決定的要因である。

此種の戰爭に於て、各交戰國が陸上に於て其地位を辛じて保ち得る限りは、海軍力が終局の勝利の鍵となる。若し吾々が現實に陸上に破れずして制海權を維持するならば、中歐國側は結局は食糧缺乏して降服させられる。現實に飢餓の點に達せざるうちに、かゝる窮乏がその國民に加はつて精神力を崩壞せしめることになる。若し吾々の軍隊が自國領土にあるならば、祖國の領土の侵入者に降服するよりは死ねと命ずる精神は、その軍隊を勵ましたであらう。しかし外國の領土の攻略を止めるよりは餓死しやうと云ふ國民はない。それ故に飢餓の虞れありと云ふことは交戰國の軍隊の最も有力なる武器であつた。英國が制海權を維持する限り英國及びその聯合國は食糧の不足或は戰爭遂行に必須なる物資の不足によつて擊破されることはあり得ない。反之、中歐諸國側は若し外部の世界の資源と遮斷されたならば勝利を得ることが出來ない。之は慘酷な考へ方ではあるが、戰爭なるものは組織的な慘虐行爲である。……榮養の不足及び惡化の結果によつて戰線の背後に於ける死亡の方が、戰場に於ての戰死者よりも數が多かつたのである。

ヴェルダン及びソンム戰がともに戰局の決定に達し得なかつたときに、交戰諸國は飢餓戰爭に當面したのである。」

Lloyd George, War Memoirs 1087—1091.

斯くの如くしてドイツの强行した無制限潛航艇戰は聯合國側の食糧供給の途を斷つことを目的とした

ものとして特殊の意義がある。

その當時を回顧したロイド・ジョーヂは、「吾々はみな、ドイツの潛航艇戰を回顧して、それを以てドイツの最大の愚舉の一であると見る傾きが多すぎる。それがドイツを究極の敗戰に陷れた致命的失策となつたことは眞實ではあるが、それは僅かばかりの違算であつて他方の側にも起り得たものである。數週間はドイツの指導者が得た信ずべき報告によつて、彼等にそれが成功だと云ふ確信を與へ、一方に英國及びその聯合諸國に一時は全く恐慌の底に陷つたほどの不安の原因を與へて居た時期があつた。英國の最も愼重なる指導者のうちの若干の人々が、吾々は敗けるであらうと考へ、吾々の船舶が未だ殘つて居るうちに媾和を結ぶのがよいと考へた時があつたのである」と云つて居る。

War Memoirs p. 1121.

「一九一七年の聯合國の最大の勝利は潛航艇の攻擊を漸次擊退したことである。海上戰局が大戰爭の決定的側面となつたので、これは世界大戰の實質的決定力となつた。この點には勝利は聯合國側或はむしろ英國の定める所であつた。此大戰が戰鬪に於て敵を破る戰爭ではなくして、先づ敵の勢力を消耗させて後に其防禦力を擊破する戰爭となつた時から、必然的に制海權が決定的要因となつた。若しドイツを弱めやうとするならば、次の二の方法のうちの一でなければならない。(一)その聯合軍の弱點を大にすること、(二)ドイツ國民の精神的緊張に對する封鎖の效果である。第一の方法に關する限りはドイツが聯

合國に對して有效にその方法を使用したのである。個々に擊破されて居たのは英佛側聯合諸國であつた。しかし第二の方法については、ドツイが聯合國側に狂暴な胴打ちを加へてその四ヶ國を逐次擊破して居る間に英國海軍の怖ろしい指がその喉を締めて居たのである。……ドイツが英國を封鎖しやうとする最大の努力は、一九一七年の末までに英國がその船舶を保護する努力が益々成功し、新船舶建造高の增加、船舶利用の改善、土地收穫增加のために作つた計畫等によつて實際に失敗に歸した。聯合國の損失は尙ほ多大ではあつたが、一九一七年の末までに、英國を封鎖しやうと云ふドイツの努力が成功しないであらうと云ふことが判つた。反之、英國の行つた封鎖は次第にドイツ國民の士氣を挫折せしめて居た。ドイツ國民は飢えるには到らないとしても、既に榮養必需品の若干は不足して居た。既に多くの快適品及び大多數の奢侈品は缺乏して居た。戰場に於ける兵士からも英國の封鎖の效果を感じ始めて居た。その糧食は敵國民のものよりも既に劣つて居た。陸上に於ては中歐諸國側は一九一七年の戰鬪には優勢なる立場にあつた。しかし最後の勝利を與へるやうなことは達成されなかつた。海上に於て敗れ、それが決定的であつた。聯合諸國が陸上に於て大戰の終結に成功せしめる唯一の機會はオーストリアを擊破してドイツを孤立せしめることであつた。それに失敗して、聯合軍のなすべきことの全べてとしては、封鎖がその怖るべき作業を完成するまで、また米國が疲勞した敵の最後の打倒に助力するために救援し來るまで持ち堪えて居ることであつた。……聯合國軍は中歐諸國が食糧供給の枯渴によつて降服の已むなき

に到るまで、その突擊を擊退して居らねばならなかつた。それがドイツ潛航艇戰の事實上の失敗が持つ眞に重大なる意義であつた。」

War Memoirs p. 1194—96.

四

世界大戰の勝敗の分岐點を定めたかゝる時期に於て、聯合諸國をして戰鬪に堪えてドイツの疲勞を待つことを可能ならしめたのは、米國の參戰に伴ふ米國經濟力の利用である。いかにして聯合諸國は米國の經濟力を自國の戰爭に利用することが出來たのか。之を可能ならしめる媒介手段としての戰爭資金がいかにして供給せられたかと云ふ、戰爭財政政策とその經濟的機能を以て世界大戰の勝敗を決定した重大原因として擧げることが出來やう。

「世界大戰の勃發より一九一七年四月の米國參戰に到る時期に、英國は米國に於て英國及びその聯合國が必要とする食糧品、軍需品其他の戰爭資材の大量の購入を行つて來た。それ等は一部は英國の輸出により、一部は金現送によつて支拂はれて一九一七年四月一日以前に米國に輸送された金は一億九千萬磅に達した。また一部は英國に所有された米國證券を動員してそれを米國に送つて支拂に充てた。すべて大戰中に英國が米國に送つた金及び證券は價額總計六億磅に達した。之等のものを使ひ盡して來た時

に、米國の金融市場で資金借入を取り定めたが、その總額は三億磅以上に達した。之等の商業債務は既に今日までに償還して居る。

米國が大戰に參加する時までに、米國に於ける英國の購入品の支拂に充てるために米國で賣り得る證券をそれ以上調達する能力が最後に近きつゝあつた。英國は英國自身の資材を買ふ必要があつたばかりでなく、聯合諸國の主なる財源となつて居て、米國の參戰の時までに聯合諸國に總額八億二千七百萬磅の資金を融通して居た。之等の貸付金を含めて、一九一七年四月までの大戰時の英國の總經費は四十三億磅に達した。この時までに英國の戰爭の費用としては一日七百萬磅の割合であつた。

米國は參戰に際しては軍事的活動に大なる役割をなす準備は全く整つて居なかつたが、共同の目的のためにその巨大なる財政上の資源を提供する用意と熱意あることを宣明した。米國軍の用意が整ふまでは米國はその資金を以て戰ふものであると了解を與へられ、英國はその聯合國及び自國の外國購入の資金調達の任務を米國が肩代りするのだと云ふ期待を以て歡迎したのは當然であつた。聯合國及び自國のために英國が資金を動員し得る能力は殆ど破壞する點まで極度に使用されて居た。英國は既にそれまでに利用し得る資源の限度まで人員と資金を求めて居たのである。

大統領ウィルソンは國會に聯合國に對する自由公債貸付の承認を求め、國會は第一次自由公債法を急速に通過せしめ、十億磅の資金を調達してそのうち六億磅は聯合國に對する貸付に使用されることにな

つた。しかし米國は、歐洲大陸の聯合諸國が外國からの購入資金調達の全責任を英國から肩代りすると云ふ提案は拒絶した。米國は米國に於ける聯合國の經費を支辨すべき資金を貸付けるだけであつたので、英國は聯合國が米國以外の國から、その中には英國をも含むが、購入する資金を續いて作らねばならなかつた。英國自身が聯合國に供給するものの多くは、英國がまた新に米國で購入して補はねばならないので、英國に對する壓力は依然として極めて強く、その結果として英國が米國に求めねばならない資金が大規模のものとなつたのである。」

War Memoirs. p 1721—1723.

米國が聯合諸國に資金を供給して、米國に於て軍需品及び食糧品その他の戰費に充當せしめるために自由公債法は既に一九一七年四月二十四日に始まり、同年九月二十四日、一九一八年四月四日、七月九日等の數次に亙つて制定されて、米國財務長官は米國の敵國と交戰狀態にある外國政府の債務證券を購入する權限を與へられ、その總額は百億ドルを超えざるものとした。休戰の時に至るまでに外國政府のために設定されたクレヂットの總額は約八十億ドルであつた。しかし一九一八年十一月十一日前に現實に現金を以て融通されたのは約七十億ドルであつた。既に設定されたクレヂットの殘額は戰爭終結後に使用されたのである。

米國參戰より一九一八年十一月末に到るまでに聯合諸國が、米國に於て調達したる軍需品・食糧品、

其他の戰費は米國政府の供給したる右の資金を根幹とし、その他に米國政府が歐洲に於て費したる軍事費其他を弗貨に振り變へ、その結果として休戰に到るまでの時期に、聯合諸國が米國財務省より與へられる財源のほかには僅かに約六億八千萬ドルを調達すれば足りたのである。

それらの財源によつて聯合諸國の政府が一九一七年四月六日より一九一八年十一月末までに米國に於て費したる戰費は次の如く示されて居る。

	（百萬ドル）
1、軍需品（軍馬を含む）	二、三五一・四
2、穀物其他食糧品	二、二四七・七
3、其他の物資補給	四二五・〇
4、海陸輸送費	一九七・六
5、利子（米國參戰前の債務利子）	四三五・〇
6、償還（米國參戰前の債務償還）	四七一・八
7、爲替資金及棉花買入資金	二、一六七・二
8、雜費	五〇六・二
9、拂戻	一、四六四・四
合計	一〇、二六六・三

右のうち(9)拂戻の項目に示される金額は帳簿上の數字で實質上の經費ではない。それ故に約八十八億ドルが米國に於て聯合諸國が支拂つた戰費となる。

Moulton and Pasvolsky, War Debt and World Prosperity. p. 35—47.

五

英國の海上封鎖に對抗してドイツの無制限潛航艇戰が、聯合諸國の軍需品・食糧品の供給不足、殊に食糧缺乏に陷れやうとする目的が正に達せられたかの如く思はれながら遂に失敗に歸した當時、聯合諸國はまた外國生產物を購入する資金にも缺乏して居たのである。それ故に假令ドイツの潛航艇の攻擊を擊退することが出來て海上輸送が可能になつたとしても、外國の物資を現實に利用し得るための媒介手段としての戰爭資金を何者からか供給されねばならない狀態にあつた。戰爭遂行に要する軍需品・食糧品の豐富なる供給を現實に獲得することを可能ならしめたのが米國政府の資金供給である。それ故に世界大戰に於て聯合諸國の最後の勝利に導いたものは米國政府から與へられた戰爭資金であつて、それを通じて獲得された軍需品食糧品其他の資材が聯合諸國民の戰鬪力及び抵抗力を强化したのである。

現代戰爭が交戰國民の利用し得る全能力、殊に全經濟力を利用して行はれる戰爭であり、其最初の且つ最大の經驗が一九一四—一八年の世界大戰である。世界大戰の貴重なる經驗は長期大規模なる戰爭に

於ける勝敗の決定が、その交戰國が利用し得る經濟力の限界の廣狹及びその利用方法の適否に依る所が多いことを敎へて居る。これは戰爭勝敗の決定原因として敗者側のカール・ヘルフェリヒも勝者側のロイド・ジョーヂもともに認める所である。それ故に戰費の資源となり得べき經濟力を最も有效適切に戰爭遂行に利用することが戰時財政政策の課題である。その目的に最もよく合致するや否やが、戰爭資金調達の方法（例、公債か租稅か）の適否を決定する條件となる。そして物資及び勞働力を戰爭遂行に使用する媒介手段としての戰爭資金調達の方法が內國債を財源とするか、租稅を財源とするかの相異があつても、戰時に於けるその交戰國民が戰費の負擔を免れることが出來ないことを、現實の生活窮乏を以てドイツ國民に深刻に體驗せしめた。いかなる大規模の戰爭遂行もその國の經濟力及び國富を減損することは避け難い。それ故に戰爭によつて減損したる經濟力を可及的速かに回復し更に强化せしめやうとするのが戰時財政に續く問題となる。

外國債による戰爭資金の調達のみが外國生產物及び生產力を利用しながら、戰時の國民がその戰費の負擔を免れることが出來る。それだけ戰鬪能力が强化される。

要するに全體戰爭の最大の經驗としての世界大戰を回顧すれば、交戰國民が戰爭遂行に利用し得べき經濟力を、如何なる過程を通じて戰爭遂行に現實に役立たしめるかと云ふ、財政政策の運用が最後の勝利に導いた決定的原因であることを敎へて居る。